

<75 年が過ぎて>

名誉団委員長 杉原 正

(はじめに)

1947 年 (昭和 22 年) 2 月 22 日、霊南坂教会でボーイスカウト東京第 4 隊 (現・東京港第 1 団) が育成会長 (教会・主任牧師) 小崎道雄、隊委員長 (教会・日曜学校教師) 佐脇大三、隊長 (日系 2 世、ハワイでスカウト経験) 今井襄二で発足して 75 年が過ぎ、今年新たな 77 年目の歩みが始まりました。

創立時に参加したスカウト達の多くが神様の元に旅立ち、発隊・草創期のこと、とくにチャーチ・スカウト (教会スカウト) について知る方が少なくなりましたので、このことを中心に書き残すことにしました。

スカウト活動は異年令児によるグループ活動が基本であることから対象となる中学生については教会の日曜学校の中等科 2 年生になりました。また小学生については近隣の区立西桜小学校 (スカウトとしての参加を許可) 5 年生として生育や環境の異なる 2 つのグループを合わせての少年達によって構成されました。

東京第 4 隊として発足し、東京第 4 団を経て現在は、東京港第 1 団と名称は変更されていますが、創設のときの共通な精神は変わっていません。

75 年を超える歩みのなか、様々な出来事がありました。そのうち、お伝えしておきたい事柄を記載いたします。

(※ 2 月 22 日はスカウト運動の創始者ベーデン・パウエルご夫妻の誕生日でもあります。)

(教会のスカウトの誕生)

霊南坂教会にスカウトが結成された経緯について「霊南坂教会 100 年史」に つぎのような記述があります。

「当時、小崎道雄は、日本基督教団議長を担いながら連合軍総司令部 (GHQ) の占領政策が日本の民主化を基調とし、わけてもキリスト教会に好意的であったことから次々と来日する宣教師たちと親交を深めていき、GHQ とも関係を持っていた。

GHQ の政策の一つとして試験的にボーイスカウト運動を再建する話題が起り、GHQ のスタッフとして駐留していたマーチン・ウィリアムズ青年と小崎の話し合いから、そのモデルケースとして 10 余名の日曜学校生徒によって、戦後の日本で最初に結成されたものである。勿論、日本連盟は未だ結成されていなかった。」
(中略)

「しかし、何もかも手さぐりで、“ちかい” や “おきて” も英語で教えるという具合であったが、こうして霊南坂教会が手がけたスカウトの働きは、日本におけるスカウト運動の先駆的役割を果たした。しかも教会のスカウトとして、独自の働きを続けた。

初期の頃は文字どおりチャーチ・スカウト（教会スカウト）として機能や性格は教会や教会学校の活動と表裏一体の関係にあり、隊員も徐々に拡大され、その隆盛時にはボーイとガールを合わせて 250 名を超える大世帯になった時もあった。」(中略)

「1948 年 6 月 6 日開催の長老会（注・役員会）は小崎から提案され、この時はすでに活動を始めていたスカウト活動を霊南坂教会が正式に承認すると共に、その円滑な活動と発展のために、教会の諸施設の活用はもとより、あらゆる面で理解と協力をすすめていくことを申し合わせた。」

(チャーチ・スカウトとして)

発隊時からスカウト活動と日曜学校（現・教会学校）とは表裏一体として受け止め、土曜日はスカウト活動、日曜日には日曜学校に出席することを基本として活動を始め、現在に至っています。

また、その後、私がジュニア・リーダー時代にスカウト活動の一環として当時の日曜学校の加藤静一校長からの要請を受けてガールスカウトと共に「日曜学校全国大会」に奉仕することになりました。

日比谷公園内の野外音楽堂や青山学院の PS 講堂でこの大会が開催され、スカウトは場外での案内や会場整理での奉仕を続けました。

その後、この大会に参加された日曜学校の関係者からスカウト活動に関心を持たれる方が広がりしました。

その中で、先ず栃木県西那須野の日本農村伝道学校の福本先生が赴任された南多摩の日野台教会でスカウト活動を始めたい、との希望がありました。今田、飯田、志水の先輩スカウト（当時リーダーとなる）と共に発隊に向けての

お手伝いをしました。そのため数回にわたって日野台教会に出向いたり、またその後、南多摩 4 隊として発隊し、初めて夏季キャンプにリーダーとして参加し、ウッドクラフトの指導にあったことは忘れることはできません。

チャーチ・スカウト（教会スカウト）としての東京第 4 隊が手掛けた兄弟隊（団）の誕生がこの南多摩 4 隊であります。後に日野 1 団に改称されて拡充されましたが現在は残念なことです、教会からは離れて地域団として活動を続けています。

（ガールスカウトも始まる）

霊南坂教会で東京第 4 隊（東京港第 1 団）が発隊して 4 ヶ月あとの 1947 年 6 月、小崎（芹野）朝子さんをリーダーに「ガールスカウト東京第 4 隊」として活動が始まります。

ボーイスカウト運動の 1 周年を記念してロンドン・水晶宮で実施された記念ラリーに女子スカウトが参加したことを切掛けに「ガールガイド」の構想が始まります。名称は「スカウト（斥候）」ではなく「ガイド（案内者）」で、インドの「ガイド部隊」に因るもので、“多方面に力を発揮し、どのような困難な状況も見事に乗り切り、あらゆる任務に全力で取り組む”、併せて「ガイド」は道を知り、他の人々を導くという意味が込められています。

ガールガイドの構想は、ベーデン・パウエルに妹のアグネスが手伝い 1912 年には「ガールガイドのためのハンドブック」が出版されます。

B-P と結婚され、レディ・ベーデン・パウエルとなったオレーブが以後のガールガイドを取り仕切ることになります。

ガールガイドの日本の伝播は、英国国教会から日本聖公会に派遣者された宣教師ミュルエル・グリーンストリートによるものであり、彼女は英国ガールガイドのメンバーでガイド運動の推進者でした。東京の香蘭女学校に赴任し、他のガイド経験者と共にガールガイド運動を始めました。

香蘭女子校で東京第 1 組（隊）を発足させることになり、1920 年 1 月に芝の聖アンデレ教会で発団式（12 名）を行っています。

1923 年には、イギリスの支部としてではなく、日本独自の「日本女子補導団」が設立されました。

戦争中は、活動を中断していましたが戦後の GHQ の占領下、GHQ の教育や文化を担当する民間情報教育局（CIE）によって 1950 年から青少年教育に携わる

指導者に対する IFEL（青少年教育指導者講習会）を開催し、その講師として米国ガールスカウト連盟のマーガレット・トゥーイ女史が来日しました。彼女はガールスカウトの指導者講習会も指導され、小崎朝子リーダーも女史の指導を受けられています。

小崎朝子さんに続いて橋下広子さん、國行（西郷）尚子さんがリーダーを引き継ぎましたが、スカウトで後にリーダーとなる臼井（根本）喜久子さん、黒部（永橋）牧子さん、原（西郷）崇子さんなど多くのリーダーを輩出し、併せてスカウトであった人々が他の団のリーダーとして活躍されたことは特筆しておきたいと思います。

（シニア班の誕生）

1947年に発隊しときに年長であったスカウトたちが3年を経て高校生となり、ボーイスカウトと分かれて別の独自スカウト活動をすすめることについて隊会議でスカウト全員で話し合いました。

1950年6月スカウト活動を続けてきた荒垣恒英、今田富士雄、飯田貞雄、稲瀬東洋志（隊の機関紙「スマイル」の初代編集長）、小崎忠雄、坂本光一（後に東京都教育長となる）、志水功の7名の高校3年生のみで、小崎兄を班長とする「シニア班」が発足します。

「小羊班（ラム班）」と命名してボーイスカウトとは別個にシニア独自のプログラム活動が始まり、とくに志水兄の指導によるウクレレ等を活用したり、合唱を含む、音楽活動も目立ちました。

当時は、まだシニア活動は正式に決められていなく、1952年5月から年長スカウト（シニア）とカブスカウト（年少スカウト）の活動が日本連盟として承認され、始動しました。

年長スカウトは、15歳6ヶ月に達したあとのスカウトとし、ボーイスカウト部門と分離しました。そして年長スカウトの活動の在り方は、大自然に対する憧れを基にした野外生活の進展とともにボーイスカウト活動に引き続き「ちかい」と「おきて」のより積極的な体現とこれによる高度の公民性の涵養と各自の生活環境に応じた興味の促進を基礎にした実技能力の向上を重点とする、こととしました。

そして一般の訓練を採用する隊を「シニアスカウト隊」、海洋訓練を主として行う隊を「シースカウト隊」、航空関係の訓練を主として採用する隊を「エアースカウト隊」と呼称するようになりました。

後述しますが東京第4隊は、1955年10月に戦後の日本で初めてシースカウト隊として活動を始めることとなります。

(初めてのシースカウト)

東京第4隊(東京港第1団)に日本で戦後、初めての「シースカウト」があったことを知っている人が少なくなりました。

英国でスカウト運動が始まった翌年の1909年2月の「ザ・スカウト」誌は、次のような記事を掲載しています。

「グラスゴーでボーイスカウトの新しい部門・シースカウトが次々に誕生している。このシースカウトは、陸上と同じく観察力、規律正しさ、愛国心、騎士道を目指して活動を行っている」としています。

イギリス・スカウト連盟がボーイスカウト運動100年に「An Official History of Scouting」(和訳本“ボーイスカウトが目指すもの”)で“スカウティングの運動は、英国全土へと広がりを見せたが、ベーデン・パウエルは、スカウティングを陸上だけのものとは、考えていなかった。シースカウトは、すぐにでもスカウティングの中でも人気のある活動となり、それは今でも続いている」と記述しています。

東京第4隊でも、シニア部門にシースカウトが設置できることを日本連盟が承認したことでスカウトの中で海洋に関心を持つ人がローバー年代を含めて多くなりました。

教会の会員で青年会のメンバーであった石川正巳兄が新設するローバー隊のアドバイザー(隊長)を引き受けました。

海洋プログラムに造詣が深かったので「セーリングの持つすばらしい力を伝えたい」とシニア・ローバー年代のスカウトのためにシープログラム活動を始めることになりました。

1955年10月に渡辺澄、川崎豊、道下恒夫、下河辺三兄弟等10名を超えるスカウトでシースカウト活動がスタートします。

船のないシースカウト活動はあり得ないと、当時の運輸省航海訓練所の練習船「日本丸」のライフボートを借り受け、修理をしつつ新橋・汐留の河口に係留

して活用していました。

一方でボーイスカウト活動に引き続いて一般のシニア活動をしたいスカウトのためにシニア隊の設置準備が始まり、1959年4月、初代隊長として今田富士雄隊長の就任となります。次いで1962年にローバー隊（隊長 今田富士雄）が発足します。このシニア隊・ローバー隊でスカウト活動を継続したスカウトたちがその後のカブ隊、ボーイ隊、シニア隊の隊長をはじめリーダーとなり、後に続くスカウトの育成に尽力されたことに感謝いたします。

（カブスカウトの再開）

英国でボーイスカウト運動が始まりましたが、その活動に年少の少年達の参加が増えました。ベーデン・パウエルは、その少年達のために、英国人ラドヤード・キップリングの著書「ジャングル・ブック」をバックストーリーとして引用し、自分の言葉で書き換えて「ウルフカブス・ハンドブック」を1916年に著して年少スカウトのために「ウルフカブ（狼の仔）」の活動が始まります。

日本のウルフカブの導入は、1923年12月、古田誠一郎（後に日本連盟副総コミッショナー・先達）や手伝った井上茂（後に日本連盟指導主事・戦後のカブスカウト活動のバックストーリーとなる「足がら山物語」の主筆）らによって神戸市須磨で神戸聖ミカエル教会でのボーイスカウト隊の弟分として、日本で初めてのウルフカブ「須磨向上会ウルフカブ」が誕生します。

当時の少年団日本連盟では、ウルフカブ年齢のスカウトを「幼年健児」と呼称して活動をしています。

戦後、カブスカウト活動を再開するにあたり、当時はまだGHQの統治下であり、GHQには米国でのスカウト経験者も多かったこともあり（英国など各種の資料が入手できなかった）、米国式のカブスカウトを導入することになります。

米国のカブスカウト活動は、永年にわたって協議され、アメリカの文化や文明は家庭から生まれ育つ、として家庭を中心にその近隣、その戸外でのプログラムを含んだ活動が中心でした。一方、英国のウルフカブはアケーラ（隊長）を中心とした野外活動、自然の中でのプログラム活動で両者の活動に差異がありました。

戦後の日本でのカブスカウト活動は、その狭間の中で再開されましたが米国式の形態を取り入れることになりました。

しかし、英国で創設された「ウルフカブ」の背景（バックストーリー）となった

「ジャングル・ブック」に代わる日本のカブスカウト活動の背景となるものとして「足がら山物語」を創作して「りす」、「うさぎ」、「しか」、「くま」、「月の輪」が活躍するカブスカウト活動としました。

東京第4隊（東京港第1団）では、1953年9月6日に新橋・浜離宮で開催された東京連盟の第1回ガブラリーに見学参加することから準備を本格的に始めます。

志水功ボーイ隊副長が初代カブ隊長に就任、遠山兼宏、杉原正が副長補として1954年6月12日にカブスカウト東京第4隊が発足しました。

スカウトは当時の教会・日曜学校初等科の3年生の以上の生徒が主体となり、近隣の氷川、赤坂、麻布、鞆絵小学校などの生徒たちが加わり、20名近くの人数となりました。

（団＜隊＞の分封）

シースカウト独自の活動がシニア及びローバー年代のスカウトで始まります。一方で一般のシニア活動を希望するスカウトのために、シニア隊の設置に向けての動きが始まりました。同じ団の中でシニア活動とシースカウト活動を同時に平行して行うことが難しい状況が起こり始めたため、シースカウト隊が別個の団として分封することになりました。

また当時、カブ隊で団委員やリーダーを務めていた大和秀雄、節子ご夫妻が米国式のカブスカウト活動を進展させたいとの希望が強くありシースカウトと共に新しい団を立ち上げることになりました。

1959年、シースカウトは新しい団本部として、近隣の麻布霞町（西麻布）にあるカトリック麻布教会で153団として発足しました。

153団のシンボルマークは、シースカウトの錨に十字架を組み合わせたものになっています。その後1年程で六本木交差点近くの大和宅を団本部として新しい156団としてスカウト活動を継続します。

153団と156団は、様々な発団の経緯はありましたが我が団とは兄弟団ということになります。156団は数年後に東麻布の久保巖団委員長のもとで新たな出発となります。

153団は東京連盟の県コミショナーになる山口英一兄がリーダーに加わり、拡充されたスカウト活動が行われています。

スカウト活動に一石を投じたシースカウト活動は、その後一旦休止となります。

す。しかし、156 団でシースカウトとしてスカウト活動を続けた川崎豊、高柳彰男兄らは、それぞれ別個の団（世田谷区など）でリーダーや団委員などで永年に亘って奉仕されていたことを覚えて感謝しています。

（マーティン・B・ウィリアムズ青年の想い）

霊南坂教会でのボーイスカウトの創設に貢献されたウィリアムズ青年は、米国アラバマ州のアラバマ・センタービル第 36 隊のスカウト。後に同地域の長老派教会のカブ隊長、またその後にワシントンでは、ボーイ隊長を務めました。

アラバマ大学で学び、化学講師を経て 29 歳で GHQ のスタッフとして来日していたが、東京第 4 隊の創設と育成、併せて日本連盟の再建に関わります。

彼は、米国で 3 つの異なったタイプの育成団体の元でスカウト活動を経験しました。その経験を経て教会がスカウト運動に最も適した育成団体であること、また、スカウト活動は、教会のすべてのプログラムの中で重要な位置を占め、他の教会の諸活動を強化することができるものであることを確信していたことは、彼の話や手紙などから窺い知ることができます。

この確信の元での要請により、小崎道雄主任牧師が教会でのスカウト運動の受け入れを決断するに至ったとも考えられます。

東京第 4 隊が発足して以来、実質的にはスカウト教育を担った今井襄二初代隊長を支え、広い意味でのスポンサーとして教会スカウトの育成に尽力されました。

一方、今井隊長は、GHQ のウィリアムズ氏の仕事でも通訳として勤めることになり、両者が共に米国では異なる場所で同じ第 36 隊ということを知り、お互いに親交が深まったと聞いています。

今井隊長は、太平洋戦争が始まりハワイから帰国し、海軍の下士官になります。スカウトの教育が、一見厳しいように見られましたが、スカウトの個性や自主性を重んじており、一人ひとりのスカウトに何か 1 つスカウト技能で得意なものを身につけることを勧めました。（火起こし、ロープ結び、手旗、モールス信号など）

今井隊長がかつて、スカウトであったホノルル第 36 隊のネッカチーフ（紺と黄）を第 4 隊のネッカチーフの色合いとして採用しました。

また自主性を促す意味でスカウトの手による機関紙「スマイル」の刊行にも繋がってきます。

(スマイルの発刊)

東京第4隊(東京港第1団)の機関紙をスカウトの手によって発行する環境を今井隊長が整えました。

スカウトに機関紙の編集にあたることを希望するスカウトに手を挙げさせ、その中から稲瀬東洋志初代編集人が決まり、1949年9月に「スマイル」第1号が発刊されます。

スカウト同志のコミュニケーションの強化、新しい情報の共有、またスカウト教育で知識やスカウト技能の習得という目標がありました。

B5版のザラ紙に「ガリ版」印刷の手刷りで4頁が基本でした。作業は大変でしたが毎月第1週の土曜日の発行が続きます。スカウトの投稿も結構あり、スカウト仲間の考え方や関心のあること、興味などが分かり、スカウト活動を続けていくことに役立ちました。

初代稲瀬東洋志編集長から篠沢明、石田隆一、青木義明兄らに引き継がれています。毎月発刊していくことは大変な作業で時の流れの中で2ヶ月、3ヶ月に1回の発刊となり、休刊の時期を数回経て残念ながらいま休止が続いています。

この機関紙「スマイル」が発行を継続的にスカウトの手で行なわれたことは、東京第4隊、東京第4団、そして東京港第1団としてスカウト活動が継続できた要因のひとつであり、大きな役割を果たしたと考えて紹介をしておきたいと思っています。

(クリスチャン・スカウト①)

全国でスカウト運動を展開しているスカウト団のうち、約15パーセントの団は、宗教団体又は関連組織が育成団体となっています。

日本連盟は「本運動に参加する者が明確な信仰をもつことを推奨する」と規定してスカウトには、「信仰奨励章」と「宗教章」を設けています。

宗教章については、仏教章、キリスト教章、神道章、金光教章、世界救世教章、天理教章の6章を定めて信仰奨励をしています。

戦後の1948年4月に「東京都連盟」が組織され、初めての登録は、区部の第1隊から第16隊と武蔵野第1隊の合計17個隊でした。

そのうち、半数の8個隊は、宗教団体とその関係組織等が育成団体になっています。その中で第4隊(霊南坂教会)と武蔵野第1隊(カトリック吉祥寺教

会) がキリスト教関係で発足した隊でした。

また、キリスト教プロテスタント系では、1960年代に入って、大阪のキリスト教系の組織「淀川善隣館」の柳原博館長などが呼び掛け人となって大阪市及びその近隣を主として日本基督教団の教会を中心に発隊を勧め、その結果10隊を超える発団し、全体の呼称として「クリスチャン・スカウト」が使われるようになりました。

現在は「クリスチャン・スカウト指導者連絡会議」が設けられており、宗教章・キリスト教章の授与の手続きに関する事務や日本スカウトジャンボリーにおける宗教儀礼の日曜礼拝などの世話をしています。

その後、戦前の少年団時代に神戸市須磨で「ウルフカブ」を日本で初めて始めた古田誠一郎先達の教え子である村島文二兄が京都の平安女学院の事務局長を務められておりました。

村島兄は京都・大阪などの日本聖公会の教会やチャプレンに呼びかけ、スカウト運動を教会で行うことを勧め、5個団程が発団しました。

その際に開催されたボーイスカウト指導者講習会に古田先達、村島兄からお誘いを受けて、カブスカウト部門を受け持った3日間の経験は今でも忘れることはできません。

(クリスチャン・スカウト②)

東京連盟のキリスト教を母体とする団が増え始め、とくにカトリック(旧教)の団が急増し、「日本カトリック・ボーイスカウト指導者協議会(CBS)」を立ち上げました。(現在は日本カトリックスカウト協議会(JCCS))

このことを踏まえて日本聖公会を含めてプロテスタント系のスカウト団の集まりを1965年9月23日、立教大学のグラウンドで「第1回クリスチャン・スカウトラリー」の名称で開催し、200名を超える参加者があり、プロテスタントのクリスチャンの交流がありました。仲間づくりの“しるし”として記念ワッペンを作成しました。以降、スカウト人口の減少に伴って、再度の“クリスチャン・スカウト”のラリーを開催することはできませんでした。

東京連盟でプロテスタント関係の教会、幼稚園、学校などでスカウト活動が最盛期のときは、次の団が活動しています。

この後に活動を終了したり、地域団に変更している団もあります。

<団・隊名>

4 団 (港 1)
△61 団 (豊島 2)
△111 団 (墨田 1)
142 団 (豊島 8)
△246 団 (江戸川 4)
△251 団 (世田谷 18)
256 団 (練馬 5)
△292 団 (豊島 12)
299 団 (杉並 9)
312 団 (新宿 18)
314 団 (港 14)
△319 団 (足立 10)
△386 団 (目黒 11)
三鷹 3 団
小金井 1 団
調布 6 団
△日野 1 団
昭島 1 団
△昭島 2 団

<教会、学校、幼稚園など>

霊南坂教会 (田中正男)
立教中学・高校 (清水琢朗)
日本ルーテル聖パウロ教会
立教大学ローバース
小松川教会 (原登)
世田谷 YMCA
練馬聖公会 (佐藤信康)
みのり保育園 (帰山祐子)
浜田山キリスト教会
戸山教会 (山田斐章)
聖アンデレ教会
西新井教会
中目黒教会 (白神章道)
国際基督教大学宗教部 (栗山俊幸)
信愛会
仙川教会
日野台教会 (多田光太郎)
昭島恵泉幼稚園 (小町国市)
福島保育園

※ △印は、廃団又は休団

※ 以上の団の中で地域団として活動を継続している団があります

(おわりに)

東京港第1団の特色は何かと考えみると、やはりチャーチスカウト(教会スカウト)であることでしょう。創始者ベーデン・パウエル卿の「先ず神の愛ありき」のキリスト教信仰から萌芽したスカウト運動。

その運動の「原理」は、“神へのつとめ”、“他へのつとめ”、“自分へのつとめ”の3つのつとめに基づいています。

“神へのつとめ”は“他へのつとめ”を果たすこと、“他へのつとめ”を果たすことは、“自分へのつとめ”を果たすことから成り立っています。

“自分へのつとめ”を果たすことは、一人ひとりが自分自身の成長に対する責任をもつこととされています。

“神へのつとめ”を果たすことは、先ず“自分のつとめ”を果たすことから始まることをスカウト活動を通してスカウトたちに提示していくことが大事と考えます。

スカウトのOB、OGからの話やスカウトクラブの会報で記載される言葉に“Once a scout, always a scout”があります。B-Pの理解者であり、協力者であった英国海軍キックナー提督の言葉であります。いま現役のスカウトもリーダーもいつもこの言葉の意味を考えてスカウト活動に日々の生活に活かして欲しいと考えます。

「こどもの日」を迎えたとき、これからのスカウト活動を考えると、15歳未満の〔子ども〕が1,435万人減少したと総務省(4月1日現在で戦後最小人数となる)の発表は深刻なことであります。急速な少子化の進展のなかでどのようにスカウト活動を継続していくかが課題となります。

隊や団の直近の大きな課題ですが、活動を支える育成会の課題でもあります。幼稚園、幼児園年代を過ぎた子どもの参加に向けて育成会員の皆様にもご理解とご協力をお願いいたします。